

和牛生産と牧野利用の展開

—長崎県小値賀島における事例—

月 川 雅 夫

(長崎県総合農林試験場)

TSUKIGAWA, M.

Development of Japanese Cattle Production and Range Utilization
in Ojika Island, Nagasaki Prefecture.

長崎県の離島地域においては対馬牛、髭岐牛、平戸牛、小値賀牛、五島牛などいづれも古くから和牛の生産地であったところが多い。そのうち、明治以降において、広く全国に知られてきたのは小値賀牛である。

小値賀牛とは北松浦郡小値賀島において飼養される和牛であって、他の産地がほぼ一郡を単位とした地域であるのに対して1町を区域とした小産地(昭和51年4月1日現在の飼養戸数457戸、繁殖雌牛頭数1,159頭)であるところにも特徴がある。

この研究は、かかる小産地において生産される小値賀牛の特質と評価、その改良、飼養形態とくに牧野利用との関連等について、明治以降の展開過程を明らかにしたものである。

1. 小値賀牛の特質と評価

離島で生産された和牛は、海上交通を利用することで比較的早くから商品化が進んでいた。明治14年全国農談会に出席した福岡県の老農林遠里が「牛馬改良蕃殖方法」という諮問に答えた「志麻那ハ多ク五島辺ノ犢ヲ購求シテ飼育ス」にある五島辺の牛とは小値賀牛のことであって、当時牛馬耕の先進地であった福岡県筑前地方における役牛として多く利用されていた。

これは、その後牛馬耕の普及を通じて全国に知られるようになった。つまり、当時福岡県から各地に派遣された牛馬耕教師の多くはこの地方の者が多く、彼らによって牛馬耕の技術とともに小値賀牛の名が広められたものとみられる。このため、明治30年代になると関東地方に送られるものもみられ、一旦福岡県に入って調教されたものが山口、佐賀、岡山等に送られるものも増加した。

明治40年、茨城県に送られたものが、その飼育関係者によってイギリスのアニマルズフレンド誌に「小値賀牛即ち世界最良の牛」として掲載され、さらに邦文が大日本農会報第322号に転載されるに及んで小値賀牛は全国に知られるようになった。このようなこともあって、大正6年、井口賢三は著書「世界の産牛」のなかで、わが国16種の一つとして、九州では大分の豊後牛とともに、日本の代表的な牛としてとりあげ、特徴として1.能く粗

食に堪え且つ寡食すること。2.体格小型にして而も力の強きこと。3.田畑の耕起耙行等最も自由にして駆者の意のごとくなり総て軽妙なること等10項目を掲げて、とくに役牛として高く評価した。

その後は次にみられる経過によって肉用としての能力も次第に高めながら改良していくが、福岡県を主体とした役用牛が中心であることに変わらなかった。しかし、昭和30年以降、耕耘過程における機械化の進行によって、和牛はさらに肉用としての能力を要求されることになり、小値賀牛も従来の小値賀牛の特徴を活かしながらこれに応ずる態勢をとっている。その結果、現在では肥育牛としての能力も高まっており、とくに肉質の点における評価は高い。

2. 改良過程

明治16年、この島に発生した牛疫調査のため派遣された農務局村上要信は、その報告書のなかで小値賀牛の由来を記した後「農家牛ヲ飼フ者ハ強テ飼牛ノ遺孽ヲ存シ他種ヲ混ズルヲ好マズ」と報告した。早くからこの島の農家は役牛、繁殖牛としての小値賀牛に対して自負していたことがわかる。その後、全国的な動向にならって明治末期から大正初期にかけての外国雑種の導入、あるいは国内でも中国地方からの種牝牛の導入等を試みることはあったがいずれも定着することなく、小値賀牛自体による近親繁殖あるいは系統繁殖による改良が昭和初期まで図られてきた。

島内における種牝牛は、小値賀本島の場合部落毎に1頭の種牝牛がおかれていた。その確保は部落毎に種牝牛候補の子牛を選定し、育成場である赤島(無人島60ha)に放牧し、2年経過したものの中からこれまで利用してきた種牝牛より優れたものがあれば取替えて種牝牛とした。種牝牛として利用されなかったものは通称マキ牛と呼ばれ、従順で力量のあることから福岡、佐賀県下で役牛とくに木材搬出の厩引牛として利用された。

昭和10年代になると全国的な動きとして各県で行なわれていた登録のうち本登録が全国統一して実施されるようになり、長崎県でも長崎県役肉用牛標準体型を設けて

改良が計画されるなど、肉用としての能力が重要視されてきた。これまで島内農家の使役と繁殖、福岡県における役用を目標とした島内産種牡牛による改良では限界を感じ、昭和13年から島外産の種牡牛を導入することにし、従来各部落に備えていたものを種畜場を設置して集中管理することにした。

一方、繁殖雌牛の選定においても小値賀牛としての優良系統の調査を実施し、それを島内に保留するための対策がとられて現在に至っている。また、県下の他産地で見られる県外産地からの繁殖雌牛の導入はなく、一定水準の小値賀牛が揃えられていることは生産地としての強みとなっている。

このように、小値賀島における和牛の改良は、それが小離島であることの立地を有利に展開したものであって、その推進者としての部落集団あるいはその連合体の役割は大きいものがあつた。

3. 飼養形態と牧野利用

和牛の飼養形態も明治前期の状態を調査した村上によれば「牛ヲ飼養スルニ毎年4月ヨリ11月ニ至ルマデ原野ニ放牧ス、然レドモ其方法ニ至テハ未ダ曾テ他ニ其比ヲ見ザル所ナリ、即チ長サ2間以上5間以下ノ細ヲ以テ突石或ハ樹木ニ繋ギ、進退違サベキノ生草ヲ食尽セシム、日中炎威熾ナルトキハ樹蔭ニ繋ギ、朝夕冷氣起ルニ及ンデ更ニ山上生草ノ繁茂セル所ニ移ス、時アツテハ或ハ雨時牛舎ニ牽キ帰ルトキハ味噌滓或ハ醬油滓ヲ与フル事アレドモ、平時ハ只夕生草ト水トノ類テ生活スルノミ、12月ヨリ3月ニ至マデ庭前ニ繋ギ乾草、甘藷蔓、大豆莢殻ノ乾晒セルモノ及ビ藁等ヲ敢テ切截セズシテ之ヲ与フ」とあるが、この方法は甘藷蔓、大豆莢殻等が飼料作物に代つたことと給与量が多くなったことを除けば、細かい

表現は別として現在でも続けられ、4月～11月における牧野に対する昼間繋牧が特徴となっている。この場合、子牛は生後一定期間（時代、部落、あるいは性別によって異なるが、現在では牝、牡とも3～4ヵ月）放牧することができ、これによって丈夫な骨格が作られてきた。

本来、小値賀町は17の島嶼から構成されている。このうち、昭和51年9月現在において有人島は7島で、他は無人数島であり、ともに牧野があつてそれぞれ異なつた利用が行なわれてきた。つまり、繋牧が行なわれてきたのは有人島の牧野（159ha）であつて、無人数島は古くから貯蔵用乾草の採草地（184ha）として利用してきた。

無人数島のうち、赤島が種牡牛育成地として放牧が行なわれてきたことは前に述べたが、マキ牛の需要が増加する明治中期以降は他の無人数島でも採草地として利用することと併せて、マキ牛生産のため放牧するところが多くなった。しかし、第2次世界大戦後は飼料作物の生産が増加したことと労力事情の変化によって条件の悪い無人数島の採草利用は廃止され、一部のところで放牧が行なわれている。また、実施の主体は管理上の問題で部落から農協に移行し、目的も種牡牛、マキ牛生産から子牛市場の価格操作的な役割をもつて、かつ農協営フィードロットにおける肥育の素牛育成となつている。

繋牧利用の牧野は、長年にわたつて行なわれ、かつ牧野面積に対して入牧頭数が多いことから生産は低い。この対策として昭和42年以降小規模草地改良事業（本島40ha）が実施された。しかし、この頃から畑作の主力である甘藷が大きく後退する時代であつて、代つて飼料作物が増加したこと、および多数の入会権者による利用が行なわれたことなどによって荒廃するものもみられ、改良草地のあり方は今後の問題を残している。